

## 文化財に学ぶ

本徳寺の北面の水路に沿って長屋塀がある。長屋塀とは塀を兼ねた家屋で、普通通用門を有する。江戸時代の屋敷によく見られる様式で、門番所や雑倉を兼ねている。本徳寺の文化財は二十棟あるが、最後に登録されたのがこの長屋塀で、東から長屋・北門・門番所・芝倉・米倉・長屋雑倉・中の門の七棟が連なっている。

眞宗文化研究室

本徳寺の北門（通用門）に穴があいた。長年、本徳寺の勝手口として使用している門である。格式を持った大門と比べて大変親しみやすい門である。長屋塀と称して塀と納屋が一体となっており、その中心に門が組込まれ一連の建造物となっている。この長屋塀は江戸中期の門構の典型で、その景観がすでにランドスケープ化していることから、以前、新聞でも取り上げられたことがある。一八九四年に市の文化財に指定された。

読売新聞「城都の面影」より転載  
本徳寺北門長屋塀



普段見慣れている者からみると当たり前の風景で何の感動もないが、心ある人にとつてはひととき風情のある景観であるらしい。慣れというのはいものだとつくづく思い知った。伝統文化から何も学べない悲惨、目の前

にありながらその価値に気づかない愚かさは現代人に共通のもののようにだ。文明化という画一主義の下、明治以降、特に敗戦後日本人は固有の文化を破壊することを当たり前のこととしてきたからだろう。

環境によって人は育てられる。使い捨て消費文化は使い捨ての人を育てる。ものを大切にす環境からは、人も大切にす社会がつくられる。そんなことを考えると、今の時代の混乱の一因が見えてきた。文化財の意味も単に古いものを残すだけではないことが知れてくる。年末の総代会で、市の文化課の指導により、この門の修理が決定された。文化財のため材料の吟味と十分な乾燥が要求される、修理は来年の春になされる予定である。